

# 筑前名所図絵にみる近世福岡・博多の空間

清 川 直 人

Keywords : space, spatial boundary, Chikuzen-Meisyo-zue, Fukuoka, environment design

## 研究の視点と目的

人間と空間の関係についての計画論的研究はすでに多くの蓄積がある<sup>1)</sup>。一般にこれら「空間の研究」は、1. 人間の意識や心理に重点を置き、観念的空間の概念化を行おうとするもの、2. 物的な空間に重点を置き、人間の観念的空間と関連があると考えられる物的空間の構造化を行おうとするもの、の二つに大別されよう。

本研究は、長期的には、人間の観念的空間の在り方に基づいた物的空間の把握を行うことから環境デザインに有益な知見を得たいと考えており、観念的空間と物的空間の関係を重視している。しかし現在はまだその基礎段階で、本論文では人間の空間に対する意識や心理などに関しては、人間と空間の関係について若干の仮説を提示するに留まった。

本研究では観念的空間を「人間と何らかの心的つながりをもつ空間」としている。そして観念的空間の中に「人間と特に強い、親密な心的つながりをもつ空間」があると考え、これを「場」と呼ぶ。「場」は人が親しみを感じ、やすらぐ空間であり「場」の有無やそのあり方は人間の存在にとって重要な意味をもっている。ここでは「場」を物的空間と区別してあつかい、これらの間には何らかの対応関係があるものとして捉えておく。

現在、環境デザイン領域では段階構成的な計画論、計画手法が一般的である<sup>2)</sup>。しかし「場」は突き詰めれば個人的なものであっていわゆる単位空間ではないので、「場」を基礎とする計画論、計画手法は段階構成的ではない独自のものになると考えられる。

本研究は、人間と空間の関係についてのこのような認識を視点とし、人々が確かな「場」を形成・保持できるような空間計画論の確立を最終的目標としながら、本論文においてはその基礎段階として、「場」の存在の条件を探りその具体例の抽出を目的とする。

## 「場」の存在の条件

「場」について仮説的な説明を行うと、第一に「場」は心像としての空間である。第二に「場」の基本的性質は一種のテリトリーである。第三に「場」は構造をもっており、また物理的空間となんらかの対応関係にある。という三点を考えることができる。

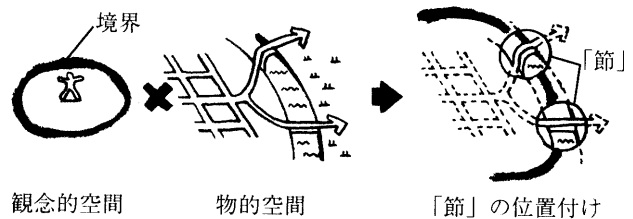


図1-1 場の概念図

「場」の性質であるテリトリー性は、「私が占有する空間」という排他的な性格を「場」に与える。このことによって空間は私に親密で安らぎを与える「場」と、私に帰属しない空間（他者の空間など）の二つの空間に区別されている。また「場」は「私の占有空間」であって限定的であるのに対して他方は非限定的であり、「場」は大きな空間から切り取られたような状態になっている。ここで「場」の存在の第一の条件として注目すべき点は「場」の境界であろう。「場」が存在するという事は、同時にその境界の存在も意味するが、境界が際立っていることによって「場」の存在はさらに確かなものとなると考えられる。

「場」の存在の第一の条件を満たすもっとも効果的な方法は、「場」の境界が人の行き来を完全に遮断するような壁であることだと考えられるが、このような壁は人間から空間的自由を奪ってしまうことになる。日常的にも我々は、自分の「日常生活圏」（例えば自分の住む町など）から出ることがしばしばあり、そこに壁があることは逆の意味で我々の生活行動を脅かすことになる。そこで考えられる「場」の存在の第二の条件は、「場」の境界には、空間と空間を連結する性質もなければならぬということである。

本研究では、このような二つの性質をもつ「場」の境界を人間に認識させる訴求力をもつ物的な空間構成要素を特に「節」と呼ぶことにする。なおこのような訴求力をもつものとして物的な空間構成要素以外に、音や光または臭いといった空間構成要素も考えられるが本編ではこれらについては考察を行っていない。

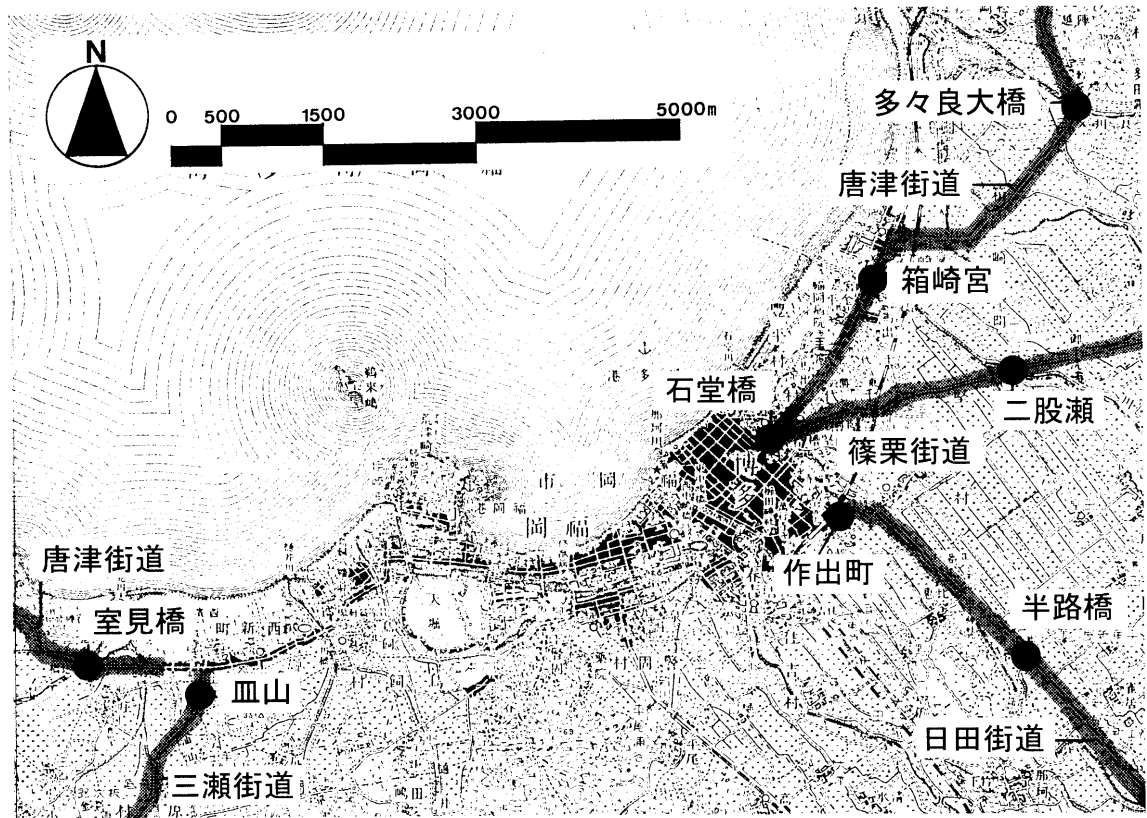


図4-1 近世福岡・博多の街道

## 研究の方法

前章において、「場」の存在の条件としてその境界が持つべき二つの性格について考察したが、次章ではこのような二つの性格を持つ境界に対応する物的空間構成要素を事例的に抽出する。調査は、事例として近世の福岡・博多を対象とし、その周辺の街道沿いに、近世に作成された地図<sup>2)</sup>と「筑前名所図絵」(4.2参照)を主な資料として、福岡・博多とその外側の空間との間の「節」を探る方法を採用する。

ここでいう福岡・博多とは、その住民が「場」と認識する観念的空間を指しており、その範囲は景観的同一性や、各種データから得られる同一性によって設定されるものではないと考えられるが、本編では調査の範囲を地形条件なども勘案して福岡・博多の中心から半径約5kmを目安とした。また近世の古地図から読み取れる福岡・博多の連担市街地は市街地内部と考慮して除外した。なお、福岡・博多の市街地内部に関しては別に考察する予定である。

本調査で近世都市を対象とした理由は、第一に近世の日本社会は現代ほど個人主義が発達しておらず、その構成員を身分などによって集团的に捉えるところがあって、空間計画にもそのような意図が現れており空間構成が把握しやすい、第二に近世の空間には現代のようなスプロール状態を呈しているところがほとんどなく、都市、田園(農村)、自然、などの区別が容易である、第三に伝統的な日本の空間デザインには空間の境界を演出する

様々な手法があったと考えられる、などである。また街道を取り上げた理由は、当時は現在に比べて道路網が発達しておらず、地域間交通はそのほとんどが街道によって行われており都市の「節」を探るためには街道に注目するのが妥当と考えられるからである。

## 近世福岡・博多周辺の街道沿いの「節」

### 4.1 近世の福岡・博多と周辺の街道

福岡県の県庁所在地である福岡市は、現在133万人の人口を抱える九州の中核管理都市であるが、その母体は、1601年から黒田氏が福岡藩の城下町福岡を、当時既に商人町として永い歴史を持っていた博多の西に那珂川を境界として建設した時に始まる。この二つの都市の市街地は、近世を通して大きな変化はなく、現在の福岡市の都心部に当たる。

図4-1は明治33年の地形図である。当時、国道のような主要幹線道路の整備はほとんど行われておらず近世の街道をそのまま利用しているので、ここではこの地形図に示されている国道を近世の街道とみなすことにする。近世の福岡・博多に接続する街道は4本ある。唐津街道は、豊前小倉(現福岡県北九州市)、若松、芦屋、赤間、畦町、青柳、箱崎、博多、福岡、姪浜、今宿、前原、深江、を通して肥前唐津(現佐賀県唐津市)へ通じる。篠栗街道は博多から金出を経て長崎街道の飯塚(現福岡県飯塚市)へ至る。日田街道は、博多から二日市、甘木、志波、久喜宮、を経て豊後日田(現大分県日田市)

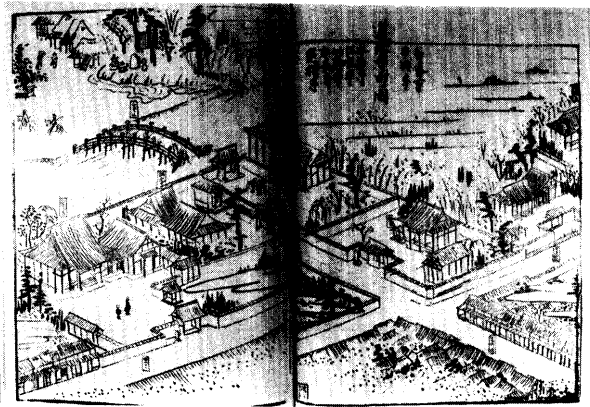


図4-2 石堂橋

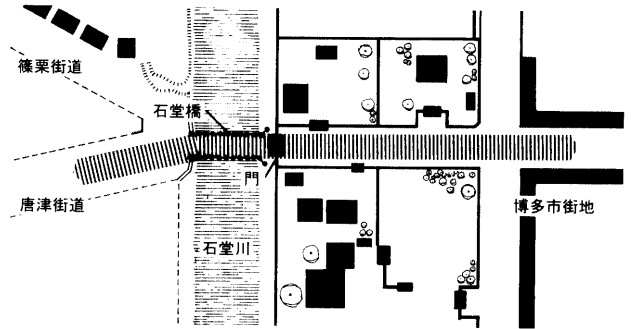


図4-3 石堂橋のプラン

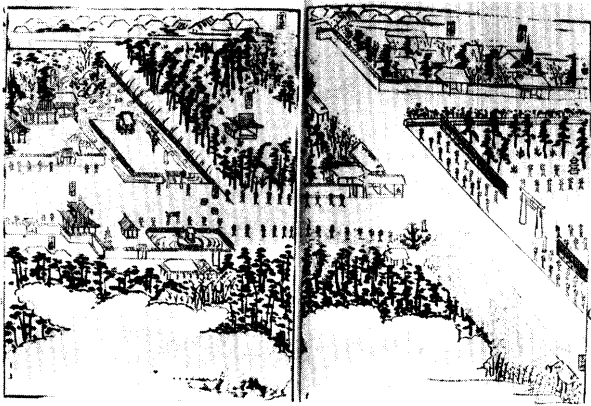


図4-4 箱崎宮 1

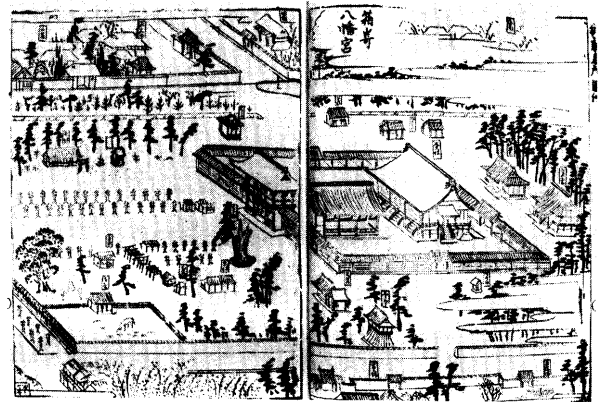


図4-5 箱崎宮 2

へ至る。三瀬街道は、福岡より金武、飯場、三瀬、を経て肥前佐賀（現佐賀市）へ至る。

#### 4. 2 「筑前名所図絵」について

「筑前名所図絵」<sup>9)</sup>の作者奥村玉蘭は博多の富裕な商人で、この図絵のために筑前国を10年にわたって巡り、資料収集、実地のスケッチを行っている。福岡、博多、および郡単位に十巻で構成され、風景画192枚、風俗、故事、その他の図101枚を収録し、写実性が高いと考えられている<sup>6)</sup>。本編で「筑前名所図絵」（以下、図絵と略記）を資料とした理由は、一つはこの写実性の高さにある。しかしこの図絵が資料としてさらに貴重な点は、作者が博多在住の商人であって画家ではなく、描かれた図絵がいわゆる名所、旧跡や景勝地に偏る傾向が少なく、福岡・博多の住民の習俗や日常生活と密接に結び付いた空間が数多く含まれている点である。この図絵には、当時の福岡・博多の人々が福岡・博多をどのような空間として見ていたかが描き出されていると考えられるのである。

#### 4. 3 福岡・博多の「節」

本節では、上述の四つの街道それぞれについて街道上にある「節」を抽出する。

##### (1) 唐津街道A

唐津街道は福岡・博多を東西に貫く街道であるが(4.1参照)、本項では街道の博多より東側について考察する。**石堂橋**

図4-2の図絵に描かれている橋（石堂橋）と門は、博多の市街地の東端を南北にながれる石堂川に架かっており、橋は反り橋で欄干も豪華である。図4-3はこの図絵から起こしたプランである。この地点は唐津街道と篠栗街道の分岐点で本州方面への交通の要の場所である。橋の兩岸は対照的で西岸（図絵では手前側）は、博多の町であるがすぐに町屋が建ち並ぶのではなく、道の両側に寺院の築地がしばらく続いている。それに対して東岸はすぐに田舎びた感じになっている。川は本来的に、その兩岸を分断する境界であると考えられるが、橋は分断されているその兩岸をつなぐ働きを持つ。さらにこの石堂橋は反り橋になっており、橋を渡るにつれて継起的に視界が開けるようになっていたと思われる、豪華な欄干と共に川の境界性を際立たせている。また橋の博多側にある門についての詳細は不明だが、神社の鳥居がそれだけで聖と俗の空間を分ける境界を示すと同時に二つの空間の接続部分でもあることに端的に示されるように、門もまた「節」と成り得るものである。この双方とも「節」と考えることのできる橋と門の組合せは、そのデザイン

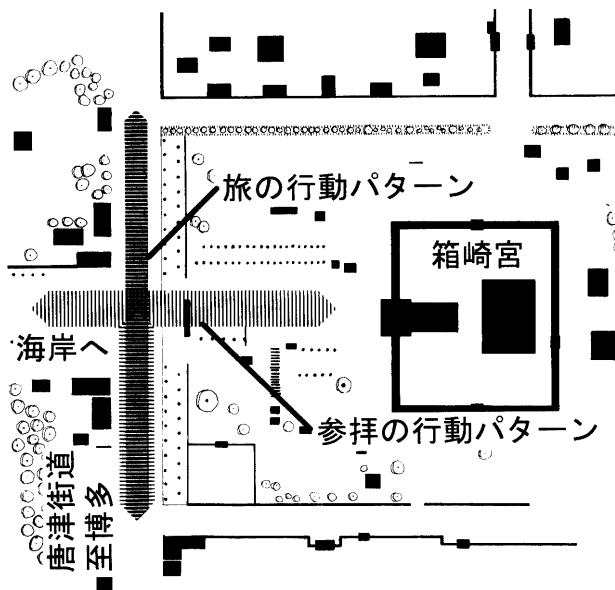


図4-6 箱崎宮のプラン

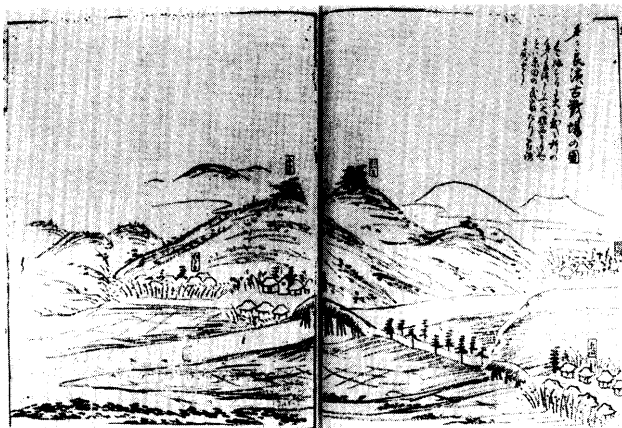


図4-8 多々良大橋

からも川の境界性を非常に強く際立たせており明瞭な「節」となっていたといえよう。

#### 箱崎宮

石堂橋を渡って2 km程唐津街道を上ると、箱崎宮に至る。図4-4、図4-5は図絵に描かれている箱崎宮である。この箱崎宮については、人々の日常的な行動パターンが表れている空間構成要素群と唐津街道がほぼ直交している空間構成に着目する。

箱崎宮は、種々の年中行事や神事で福岡・博多の人々の日常生活と深く係わっていて<sup>7)</sup>、人々は日常的にここを訪れ参拝している。本殿に直線的に向かう参道は燈籠や鳥居などの空間構成要素群に参拝時の人々の行動パターンが表れている。唐津街道はこの行動パターンを横切るかたちになっていて(図4-6参照)、街道の両側にこれら要素群が並んでいるのを見ることができる。街道上を移動してここを通過するときのこの眺めは日常慣れ親しんでいる空間から「外に出る」という印象を強く与えたと思われる。福岡・博多の人々にとってこの空間構成は「節」としても認識されていたといえよう。



図4-7 多々良大橋付近の地形

#### 多々良大橋

図4-7は明治33年の地形図であるが、前述した通り太線で強調している国道を唐津街道とみなす。

この地形図によると、唐津街道は、箱崎宮の500M程北で東へ折れて田圃に出たあと、原田の集落で再び北東の山に向かって大きく曲がり山裾の多々良大橋を通過して山際を蓮華坂へ北行している。唐津街道のこの部分について、図絵には図4-8に示すように原田の集落から蓮華坂までを描いたものがある。前述の石堂橋と原田は、直線距離で3 km程あり、原田から多々良大橋は2 km弱の行程である。この原田、多々良大橋の地域は福岡・博多とは異質な田園地帯であるが、地形的には両地域とも福岡平野の一部分である。原田、多々良大橋地域はこの福岡平野の周縁部にあたり、外側の山間部に接するところである。福岡・博多の人々にとってこの地域にみられる平地から山地へという地形の顕著な変化は単なる風景的なコントラストに留まらない印象的なものだったのではないだろうか。確かに同じ平野部とはいっても福岡・博多の市街地とこの地域の景観は異なるが、さらに景観的に違いの大きな山間部を目の当たりにすると平野部全体が一つの大きな「場」という印象が強くなる。この山間部に入って行くことは、このような「場」から「外に出る」という印象を与えたと考えられる。地形図に示した多々良川はこの意味で平野部という「場」の境界となっておりこれに架かる多々良大橋は前述の石堂橋の項

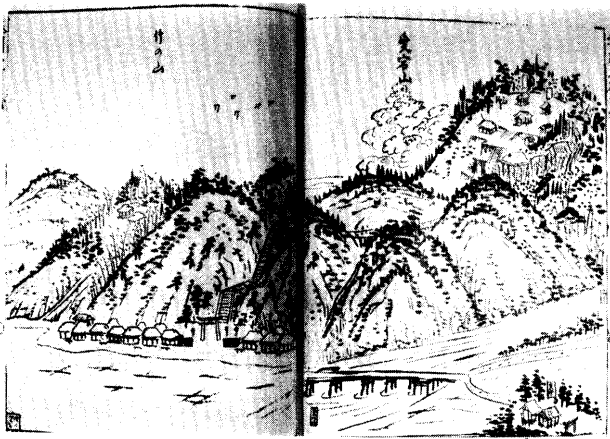


図4-9 室見橋



図4-10 藤崎口

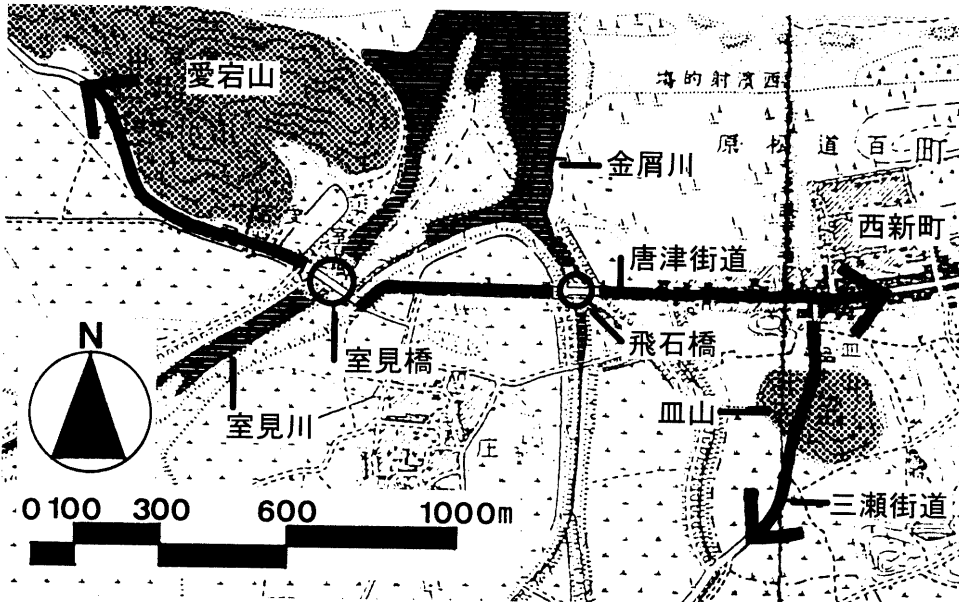


図4-11 室見橋のプラン

で説明したようにやはり「節」となっていると考えることができる。

また、街道はこの部分の行程において2箇所大きく方向を変えているが、そのうち原田の集落での曲がり、それより博多寄りの街道上での眺めが開けた田園風景を主にして多々良大橋が左に見えるのに対して、眺望の利かない原田の集落を通り抜けると多々良大橋と山が正面になる風景に変わっており橋と山を強調する演出的効果があると考えられる。

## (2) 唐津街道B

本項では、唐津街道の福岡より西側を考察する。

### 室見橋

図4-9は、図中右から左へ唐津街道（上側の道路）、川（室見川）、橋（室見橋）、山（愛宕山）などが描かれている。図4-10は、図4-9の東に続くもので、西新町（当時の福岡市街地の西端）の西端を描いた図絵であ

る。図中右から西新町の家並、川（金屑川）、橋（飛石橋<sup>81</sup>）2本の道路などが描かれている。この2本の道路の図中上側が唐津街道で西新町を通過して福岡の中心部へ通じる。両図の間に切れ目はなく両図を合わせると1km程の範囲が描かれていることになり、福岡・博多の中心部からは5～6kmのところである（図4-11参照）。

唐津街道は、福岡・博多の中心部から西新町までの間は、市街地を通過しているが図4-9の図絵に描かれているように西新町より西には建物がなく田園風景へ景観が変化す

る。唐津街道はこの市街地が途切れたところで金屑川（飛石橋）を渡り、さらに500M程西の愛宕山の山裾で室見川（室見橋）を渡って山沿いに西へ伸びる。この愛宕山は街道の金屑川付近から見え始めたと思われるが、この辺りにはこれに匹敵するものが他にないので目だつ存在になっている。金屑川に架かる飛石橋は街道からの眺めが家並から愛宕山へ変わるところにあり「節」となっていると考えられる。

またこの山に祀られている愛宕神社は鎮火、開運、延命長寿、商売繁盛、の神として庶民の崇敬を集め福岡・博多の人々は月参りをした。愛宕山はこの周辺の主要な空間構成要素であると同時に人々の日常生活とも関係が深い場所であった。唐津街道の金屑川以西の行程はこの山を景観的ポイントとしている。室見橋は、愛宕山に象徴される日常生活の「場」である福岡・博多の境界を示す訴求力をもった「節」となっているといえよう。



図 4-12 二股瀬

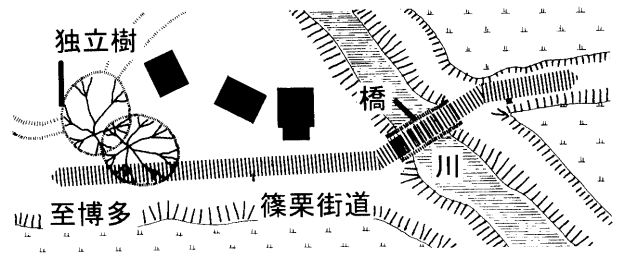


図 4-13 二股瀬のプラン

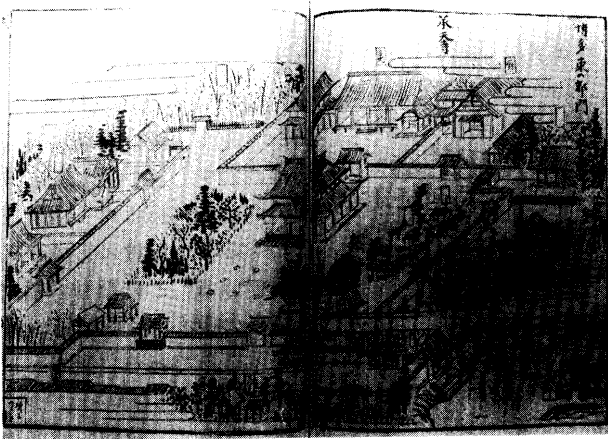


図 4-14 博多東の郭門



図 4-15 作出町

### (3) 篠栗街道

#### 二股瀬

篠栗街道は、博多から長崎街道の宿場飯塚へ向かう街道で、前述の石堂橋を起点に東へ約 8 km の間は平坦な田園地帯を通っており、街道はこの石堂橋から約 2.5 km の二股瀬で川を横切っている。図 4-12 は二股瀬の図絵で図 4-13 はそのプランである。この空間は川と橋、2 本の樹木（独立樹と呼ぶ）、数件の茶屋らしき建物、道標等の空間構成要素で構成されている。平坦で変化に乏しい田園地帯の中にあっては、この空間が人々に印象的な場所であったことは十分に予想され、この川は福岡・博多の境界としての意味をもっていたと考えることができよう。このように考えるならば、端的にはこの川に架かる橋を「節」として取り上げることができるが、ここでは橋が「節」となっていることを前提に、独立樹を橋と同等以上の意味をもつものとして取り上げたい。この独立樹は前述の通り田園地帯にあって視覚的に目だつ存在であったと思われるが、この独立樹は二股瀬の橋と川の位置を示す、遠方からそれと認められるマークになっていたと思われる。「節」としては橋を取り上げるが、こ

の独立樹の存在は重要である。

### (4) 日田街道

#### 作出町

日田街道は、博多市街地の南東端から福岡平野を南下する街道である。街道は、図 4-14 の右下に描かれている門を起点として、まず左へ折れ、図中、右へ延びている。図 4-15 は、それに続く部分で作出町と呼ばれる。この間に若干描かれていないところがあるかもしれないが近世の古地図から街道が直線的であることは確認できる。この作出町を出たところには川が南北方向に流れていて、街道はこの橋を渡ったところで右に折れて田園地帯を川沿いに南下する。作出町の両端にある門と橋は、石堂橋とその門と同じようにそれぞれを「節」とみることができるが、ここではもう一つ、別のタイプの「節」を考える。

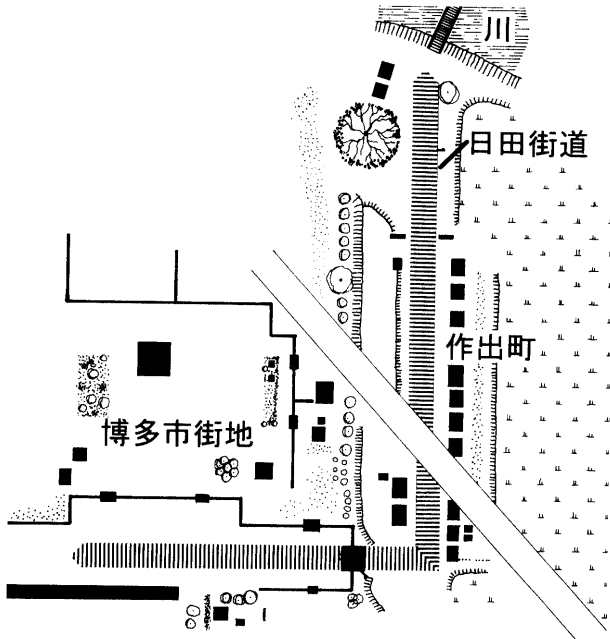


図4-16 作出町のプラン



図4-18 比恵山王社

図4-16に示すように日田街道の博多の起点部分は線形がクランク状になっており、この折れ曲がりをも境として町屋と寺院の築地が続く博多の町並み、多少田舎びた感じがある街道町的な作出町、福岡平野南部の開けた田園風景、という都市から田園(自然)へ段階的な、三つの景観に区分される。この折れ曲がりによって三つの景観は一気に展開してしまうことが妨げられており、移動に伴って景観は継起的に変化する。これによって都市から出て行くという印象が段階的でまた継起的なものとして与えられたと考えられる。この街道の折れ曲がりによる景観変化の効果も「節」としての働きを備えていると考えられよう。

#### 半路橋

日田街道は、作出町を出て12km程の間は、福岡平野の中央を通る平坦で、景観も田園風景の広がる変化に乏しい行程である(図4-17参照)。図4-18は日田街道を作出町から2km程南東に下ったところにある比恵、山王

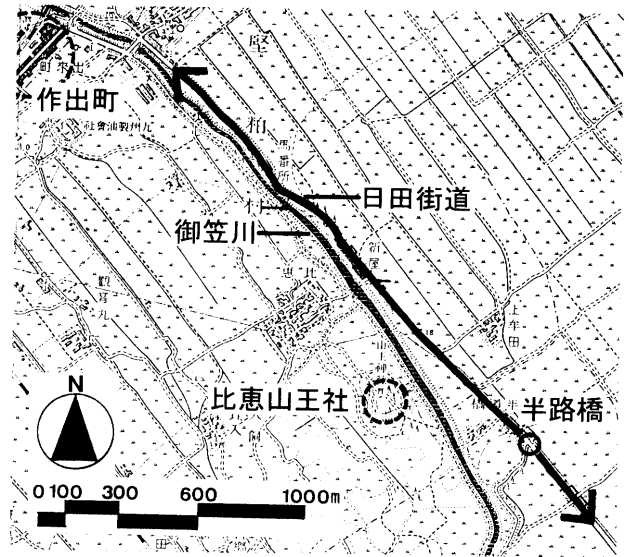


図4-17 比恵山王社付近の地形図

神社と半路橋(はんみちばし)の図絵である。図の上方中央に山王社、その下に左から右へ石堂川、下方に川に並行して日田街道、その左隅に半路橋と茶店らしい建物が数軒描かれている。図絵を見るかぎり神社も橋も際だった特徴はなく、普通の村社、粗末な橋でしかない。だが上述のような変化に乏しい街道上では、このような神社や橋でも十分印象的だったのであろう。作出町を出た後の最も手近な目標として神社(林地)があり、それは半路橋の位置をも示していたと思われる。この半路橋は変化に乏しい街道上では重要な「節」になっていたと考えられる。また神社(林地)もそれが橋の位置を示すマークになっているという意味で重要である。

#### (5) 三瀬街道

##### 皿山

玉蘭は、三瀬街道沿いでは図絵を一枚も描いていないが、街道は西新町を出て200M程進んだ所で小さな山にある集落を通過するようになっている(図4-11参照)。当時、西新町は東西に延びる道路(唐津街道)沿いに線状に市街地を形成している。その奥行きのない市街地の南側は田圃等に利用されている平坦な土地で、視界が開けていたと思われる。しかし、この街道の部分だけは、西新町の市街地を抜けても、山(皿山)があるため進行方向への視界は開けておらず、山を通過してはじめて視界が開けるような空間構成となっている。

この山は、景観の展開を妨げることによって、福岡の境界を印象づけ、それと同時に山を登ったときに得られる眺めは外側へのつながりを印象づけたと思われる。人々に与えるこの二つの印象からこの山も「節」となっていたと考えられよう。

表5-1 図絵に描かれた「節」

|        | 石堂橋 | 箱崎宮 | 多々良大橋 | 室見橋 | 二股瀬 | 作出町 | 半路橋 | 皿山 |
|--------|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|----|
| 橋      | ●   |     | ●     | ◆   | ●   | ●   | ●   |    |
| 門      | ●   |     |       |     |     | ●   |     |    |
| 行動パターン |     | ●   |       |     |     |     |     |    |
| 道の線形   |     |     |       |     |     | ●   |     |    |
| 山      |     |     |       |     |     |     |     | ●  |
| 強調要素   |     |     |       |     | ●   |     | ●   |    |

◆印は「節」が2つ抽出されたことを示す

### まとめ

4章で「場」の境界を人間に認識させる「節」の抽出を試み、12の空間構成要素を「節」として抽出した。そのなかには二股瀬の橋や、半路橋のように規模的にも、形態的にも目立たないものが含まれているが、筆者はその理由を、当時の福岡・博多の人々がこれらのものを「場」の境界を示すという重要な意味を担った「節」として認識していたからだと考える。

今回の調査で抽出された「節」は、橋、門、行動パターンを表す空間構成、道の線形、山、の5種類に分類できる。次に、抽出された「節」をこの種類別にまとめ若干の補足をしたい(表5-1参照)。

**橋：**抽出された橋は石堂橋、多々良大橋、飛石橋、室見橋、二股瀬の橋、作出町の橋、半路橋、の7箇所である。いうまでもなく橋は川に架かるものである。川は境界としてのイメージが強く<sup>9)</sup>今回の調査範囲内で街道が川を通過するところはほとんど全てが抽出された。自然地形の要素である川は、「節」形成にとって重要なものと考えられよう。

**門：**抽出された門は石堂橋の門、作出町の門、の2箇所である。どちらも博多の市街地の端に位置し、街道の起点にあたる。門をはさんだ内と外は景観的な相違が大きい。まさに都市と農村・自然の境界になっている。他の「節」と比較して空間を分割する傾向が強いと考えられる。

**行動パターンを表す空間構成：**抽出されたのは箱崎宮である。箱崎宮の空間構成に表されている参拝時の行動パターンを唐津街道が横切るようになっていることが重要である。また、当時の人々の日常生活に係わりの深い箱崎宮が都市の周辺部に配置されていることでかえって都市の境界を明確にしていると考えられる。

**道の線形：**抽出されたのは作出町の道である。ここ

では、2箇所の道の曲がり有一種のスクリーンにして、継起的で段階的な景観変化が起こる。通行者がもつと思われる景観の変化への期待を実現していることが重要だと考えられる。

**山：**抽出されたのは皿山である。この皿山を一種のスクリーンとして、山の手前の閉鎖的な景観と山の上からの眺望という景観の変化がある。上述の「道の線形」と同じようにこのような変化が重要と考えられる。また今回の調査で次の2点についても明かとなった。二股瀬の橋、5種類の「節」はそれぞれ単独でも人々に「場」の境界を際立たせる訴求力をもつと考えるが、複数の「節」が組み合わされている場所も多い。

### 謝 辞

この研究を進めるに当たり、筑波大学の土肥博至教授(現神戸芸工大)、九州芸術工科大学の若林時郎教授(現東和大)に多くの御教授をいただいた。心より感謝致します。

### 註

- 1) 次のようなものが出版されている。  
ケヴィン・リンチ、丹下健三 富田玲子訳：「都市のイメージ」、岩波書店、1978  
鈴木成文ほか：「建築計画学 5 集合住宅地区」、丸善、1974  
志水英樹：「街のイメージ構造」、技法堂、1965
- 2) 主に住宅地計画などに用いられる計画論、計画手法で、生活上の便宜、生活環境の維持・運営など観点から数段階のレベルで空間を捉え、空間的に表現しようとする方法。一般に近隣住区を単位とする。下位のレベルの数個の単位空間の集合が上位レベルの単位空間となるようなヒエラルキーのあるピラミッド状の空間構成をつくる。
- 3) 使用した地図は次のものである。  
(1)「福岡御城下絵図」作成年不明 福岡県立図書館蔵  
(2)「福岡御城下絵図 中通り」元禄12年 福岡県立図書館蔵  
(3)「福岡御城下絵図 武梁橋ヨリ中島橋ニ至ル」安永6年 福岡県立図書館蔵  
(4)「福岡御城下絵図 壹梁橋ヨリ藤崎口ニ至ル」安永6年 福岡県立図書館蔵  
(5)「福岡城下町・博多・近隣古図」文化9年頃 日本写真新聞  
(6)「福岡城及び福岡博多古図」文化文政の頃『福岡城及福岡博多古図集』九州公論社
- 4) 若林、大島、清川、他：福岡市街地の形成過程に関する研究その3 基幹的交通施設の整備過程 日本建築学会九州支部、1988
- 5) 奥村玉蘭：「筑前名所図絵」、西日本新聞社、1973
- 6) 奥村玉蘭：前掲書 解説
- 7) 毎年8月15日の「放生会」では「幕出し」といって町単位に幕を張り野宴を催し、博多の人々はこの日に衣替えをした。また「お潮井取り」は、旅立ち、外出、新築、病気全快などにまく砂を採る神事で博多の重要な年中行事の「山笠」にも関係が深い。その他、「玉せせり」、「騎射」などの行事や神事がある。
- 8) 図絵には飛石橋は橋脚のようなものだけが描かれているが、資料とした図絵が最終のものでないためまだ橋を描いていないものも考える。
- 9) リンチは川をエッジの例としてあげている。(ケヴィン・リンチ：前掲書)